

釣りに釣られて

高原英夫

第二十八回 「健康寿命」

平成二十四年六月一日付「東奥日報」夕刊の一面に、厚生省が健康寿命を初めて算出したという記事があった。健康寿命とは介護を受けたり寝たきりにならずに、自立して健康に生活できる期間をいうのだそうだ。それが、青森県の男性の場合は二〇一〇年で六十八・九五歳ということで、全国で一番短いという。全国男性の平均寿命に比べると十歳近く少なくなっている。

確かにこれまで平均寿命でばかり寿命を見てきた我々にとって、元気で暮らせる寿命という考え方はとても重要だと思う。私の母親にしても八十六歳で逝ってしまつたが、十年くらいは、介護を受けたり入退院を繰り返して、元気で暮らしたとは言えない。もつとも、大切な肉親なのだから、どんな姿であれ一瞬でも長く生きていて欲しいと思うのもまた人情なのだが。

つい最近、会社の後輩が亡くなつたと突然の知らせがあった。五十八歳だった。

肝細胞癌に冒されたのことに聞いたが、さぞや無念だったろうと思う。遺影は穏やかに微笑んでいた。手を合わせていると、酒が好きで温和な彼の様子が頭に浮かび、何度も「早過ぎる」と心の中でつぶやいていた。

幸いにして、私は第一関門の会社生活は二年前に無事に終えた。以前にも書いたが、高校時代の同級生や同僚を何人ともなく送っていると、今があるのが本当に幸いと思えてくる。だが、健康寿命に話を戻すと、おいおい、釣りだ山菜採りだと騒いでいられるのもあとわずか六、七年だぞ、と追い立てられているような気がしてくる。

釣りはかなりハードな遊びである。釣りの前日は興奮してあまり眠れない。その上に波に揺られ鋭くとんがった針を扱う。気も張るし体力も使う。会社の先輩でも定年後数年は海釣りをしていたが、もう体がついていかないといって私に竿をくれた方もいた。先輩は、今はもっぱら囲碁を楽しんでいる。

そうかと思うと、何度か竜飛と一緒に釣りに行っているAさんは、どうも今年は

竿を特注し新調したようだ。例のNさんも使っているのと同じ竿が、薄緑色に透き通って、どうだといわんばかりに船べりに据えつけられていた。その日はヤマセがひどく、朝四時に船を出したものの、波も高くて釣りにならず十時には納竿となった。私などは、まだクーラーの底は見えていたのだが、Aさんには新調した竿の魂入れに、何と七十センチオーバーのヒラメがかかった。「これ一匹で充分、充分」と独り言を繰り返していた。

Aさんは七十六歳だという。テンカラ釣りのエサに使うサバはそのまま持つて来て、船上で短冊状に割いて切り身にして八本の枝針に次から次とつけていく。去年、やたらとアブラヅノザメが釣れたことがあった。その時など「これは煮つければウマイ」と気味悪がつている私の釣った分まで引き取り、クーラーを満杯にして揚揚と帰っていった。サバを割いた包丁も、クーラーも、道具も何もかも角が擦れ年季が入れるだけ入り、しかし本人はまったく枯れた風が無い。少しメタボ気味ではあるが、船上でもいたって軽快なのである。

Nさんが言うことには、Nさんの亡くなった父上の時代からの釣り仲間だとう。父上は、自分が死んでからでもAさんを釣りに誘うようにと言い遣したというのだから、幸せな釣り人だと思う。それだけ周りを明るくしたり、一緒にいて楽しいと思わせる何かを持っているのに違いない。いや実際そういう人だ。あの様子だとあと五年は大丈夫だ。

モノクロの写真の中で大きなヒラメがまっ白な腹を見せ、手に吊り下げられていた。通夜の会場入口の脇に設けられた「故人の思い出のコーナー」のワンショットだ。仁王立ちし自慢げなKさんの顔。確か下北の下風呂だったと思うのだが、そのことは本人から聞いた覚えがあった。弘前から下北までカレイ釣りに行き、ほとんどソコク状態で戻った話など次々と思いついて出していた。それはKさん、第一話で書いたKさんの葬儀でのことだった。

桜が咲く頃、今から十数年ほど前の陸奥湾はカレイ釣りの絶頂期になっていた。平内のある港から船を出すと、マガレイ、マコガレイついでにアブラメと、ともかく釣れた。特にマコなどは身が厚く、時に四十センチを超えるのが釣れてくる。その位の大きさになるとアタリが違う。あの小さいカレイのプルプルと震えるような感じではない。コツツ、コツツとアタる。そして誘いで竿を上げていくと仕掛けの三番目の針が海底を離れたらいいのだが重みを感じる。もう五センチ上げてみるとグアン、グアンと少し竿をあおるような感触がある。もう一度竿を下げ、しっかりと食い込ませ、もう一度上げる。またグツ、グツときたらもう大丈夫だ。グイツとあわせ、マコのあの重みが乗つたらもう巻き上げるだけだ。しかしマコはアブラメかと思うほど身を振る。手持ちの竿先が海面に突つ込み、左腕もそのアクションのクッションにして、ゆっくりゆっくり巻き上げる。やつと船に上げるとマコはバタバタと床を叩き、他の針についていたイソメがその勢いでプツプツと切れて飛んで行く。そんなことが何度もあった。

Kさんは大手術のあと、弘前に転勤となり定年を迎えた。ただ術後の様子を見るために月に一度は東京の病院へ通っていた。毎年の年賀状には、小さな文字でその後の病状がこと細かに綴られていて、生に対する強い願いと同時に、不安もまた伝わってくるのだった。そんな中のある年の春、家内の実家が弘前ということもあり、花見に来たついでにと平内で釣ったカレイを持ってKさんの家を訪ねた。それは何年か続けていたことではあったが、その年は何か特別な気がしていた。だから、青森からの車中で、家内には、Kさんの具合が良かったら私をKさんの所へ置いて一人で実家に行くようにと話をしていた。私はできることならKさん宅へ上がり、カレイ釣りの話でもしながら一杯という気持ちだった。

玄関で呼鈴を鳴らすと奥さんが出て、すぐKさんも顔を見せた。当然、近況を話してくれたのだが、私にはその話しぶりが以前より弱々しく映り、とても上がって話し込んだり、ましてや一杯やるなど無理に思えた。また回復した時にと数分の会話で切り上げざるを得なかった。その日は肌寒く、Kさんがわざわざ外まで出て見

送ってくれたのだが、体にさわらないか心配になるほどだった。

それから一ヶ月と少し経った頃、奥さんから早朝に電話があり、前夜遅くKさんが亡くなったとの知らせを受けた。突然のような気もしたし、五月に会った様子からやはりという気もし、頭が混乱してまともな慰めの言葉も言えないまま受話器を置いた。あのカレイを持つていった日が最期になってしまった。上がり込んでもつと話をしておけば良かったと何度も思ってはみたが、あの時はあれで仕方がなかったと自分を納得させた。

釣りを覚えて良かったと思うことはもちろんである。魚の大小や多い少ないだけでなくタイが、カレイが、ヒラメがと話題のスイベルとなり、人と人とを結び、寄りをつなげてくれた。それ自体がもう立派な釣果と言える。そしてやればやる程奥が深く楽しい。

だが、リストラにあい、釣りどころではない、心臓を患い体に無理をかけられないなどなど、釣りから離れていった仲間もいたことも事実だ。

果たして私の場合、健康寿命はあとどれくらい残っているのだろうか。Kさんのように人に見せて自慢できるような魚はいつ釣れるのだろうか。

また今月末には釣りだ。前はいつにない不漁だった。今年はエサになるイワシが市場に無い。暇をみてはイワシを探しまわっている。フツフツと湧き出してくる期待のアドレナリン。

私は子供のように、今日も海原で竿の穂先を見つめている自分を思い浮かべているのである。

平成24年7月